

英霊の力を持って異世
界からくるそうです
よ？

松江陸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自称神の不手際で死んだ主人公三神直樹は、箱庭で3人の問題児と共に暴れ回りま

す。
この作品は、『クラスカードを持って異世界から、くるそうですよ』のリメイクです。

目次

プロローグ	1	第9話	白夜叉とギフトゲーム2	39
第1章 YES！ウサギが呼びました！		第10話	白夜叉とのギフトゲーム3	45
第1話 初の夢幻召喚（インストール）	7	11話	白夜叉とのギフトゲーム4	56
第2話 黒ウサギと出会う。	12			
第3話 ギフトの弱点	16			
第4話 ジンIIラッセル登場	20			
第5話 耀のギフト	24			
第6話 ギフトの暴走	29			
第7話 サウザンドアイズ	34			
第8話 白夜叉とのギフトゲーム				

プロローグ

俺こと、三神直樹は気付いたら真っ白な空間にいた。

「ここは、何処だ？ 確かさつきまで、あいつといっしょにいたはずなんだが」
俺がそんな事を呟いたら、後ろから声が聞こえてきた。

「ここは、死後の世界ですよ。三神直樹さん」

誰だ？ 何処にいるんだ？

「ここですよ。あなたの後ろです」

その声の通り、後ろを向きと、其処には、さつきまでいなかった女性がいた。その、女性、なんか神々しい感じがしている。そう、まるで神のようだ。

「いえ、まるでではなく、まじの神なんですよ。生と死を司ります」

まじの神!!？ そんな事より、今、生と死を司るって、まさか俺は・・・

「その通りです。あなたは、死んでしまったのです」

「嘘だろ俺は、死んだ記憶が無いんだけど」

確かに俺は、死んだ記憶が無い。いきなり死んだといわれても、納得がいかない。

「記憶が抜けているようですね。ゆっくりと思い出してください」

「マナさんは、無事ですすよ」

「そうか、それは、良かった」

「はい、やっと自分が死んだのを、理解しましたね」

「ああ、死んだのは、理解できた。でも、わざわざそんな事で神がいるのが理解でき無いらんだが？」

「はい、それは謝罪の為です」

謝罪？何でまた。まさか…

「はい、其のまさかです。本来ならば、あの時間に、車が事故を起こすのは、ありえないのです。なのに、事故が起こり、そしてあなたは死んでしまった。原因は、不明です。本当にすみません」

と、女神が謝って来た。

「なので、あなたはこれから、異世界に転生してもらいます。今回は、こちらの不手際なので、何か一つ特典を用意しますので、何がよろしいですか」

まじかつ！転生できるのか。特典も貰えるし、そうだな…

「なら、フェイトの、全サーヴァントの能力が欲しいな」

「分かりました。それで、よろしいですね」

「ああ、お願いする」

「では、この丸い模様の所まで、来てください」

俺は、その通りに丸い模様の所の上に立った。すると、天井？から一本の紐が垂れてきた。

「おい、まさか…」

「では、良き異世界世界を楽しんでください」

ガチャ

「ウワァー——————」

そして、俺の異世界世界が、始まった。

「やれやれ、変装は疲れるね。それでも舞台は整ったよ。僕はハッピーエンドが好きだからね。後は君しだいたよ***君」

「ウワァー……」

今、俺は、上空を、ダイビングしている。もちろん、パラシュートは無しだ。

「転生して、さっそく、生命の危機☒嫌過ぎるぞ」

そう言いながらも、何か無いか探していると…

「うん？俺以外にも、パラシュート無しのダイビングをしている奴らがいる？誰だろう？」

そして、よく目を凝らして見ていると、其の3人の特徴が見えてきた。

1人は、いかにもお嬢様みたいで、今の状況に驚いているが、何かに、期待している目をしている。

2人目は、パラシュート無しダイビングをしているのに、顔色ひとつ変えず三毛猫を抱えている。ちなみに、三毛猫は、とても驚いている。

最後は、いかにも不良少年みたいで、今の状況が面白いのか、笑っている。

この3人と、1匹は、初めて見たはずなのに何処かで見た事があり、何処で見たか思い出していると、すぐに思い出した。

「あいつら、問題児たちが、異世界からくるそうですよ？の、主人公たちじゃん。まさか
…」

そう、俺が、転生したのは『箱庭』だった。

第1章 YES！ウサギが呼びました！

第1話 初の夢幻召喚（インストール）

「三ウワアーーーーー」

俺、三神直樹は女神に転生されて、今俺は上空約3000mから落ちている。

「どうする□このままだと、下の湖に落ちて全身濡れちまう。そうだ！さつそく特典のサーヴァントの力を使って……いや待て、俺使い方知らねー」

ノリツツコミしながらも、何かないかとポツケの中を探していると、入れた覚えがない一枚の手紙があった。

「うん？何だこれ。入れた覚えがないのだが。なになに『三神直樹さんへ、女神より』だと、まさか、サーヴァントの力の使い方が書いてあるかも」

そこで俺は、さつそくその手紙を読んでみる事にした。

『拝啓

久しぶりですね、三神さん。三神さんがこの手紙を読んでいるということは、サーヴァントの力を使わなければならない状況ということですね。ならばさつそく教えましょう!!？まず、左脚を見て下さい。』

左脚？さっそく見てみると、カードケースがあつた。まだ手紙が続いてるので読んでみる。

『そこに、カードケースがあると思います。このカードケースの中に、10枚のカードがあります。それぞれ、セイバー、ランサー、キャスター、バーサーカー、アサシン、ライダー、アーチャーそしてエクストラのカードです。そのカードを使い、サーヴァントの力が使えます』

それって、クラスカードみたいだな。パクつたのかな女神

『例えば、ランサーのクーフリーンが使いたい場合、まずランサーのカードを持ち「夢幻召喚（インストール）ランサー」と叫んで下さい。まあ叫ばなくてもいいんですが』

いいんかい。

『ここからが重要です。心の中または、しゃべってもいいですが、夢幻召喚（インストール）したいサーヴァント今はクーフリーンですが、そのサーヴァントの真名を言ってください。そうすると、そのサーヴァントの力が使えます。あと、注意事項で』

まだ、手紙の続きがあるみたいだが、もうすぐで湖に落ちてしまうから続きはあと!!
?さっそくガードケースから、キャスターのガードを取り出してみる。

「よしっ、ならさっそく使いますか」

「夢幻召喚（インストール）キャスター!!?」

「真名は、メディア!!?」

そして、俺は、キャスターになった。なったには、なったんだが相変わらず落ちてい
る。

「つていうか、力の使い方とか分からねえし」

と、叫んでいるときなり頭の中にキャスター、メディアの知識が流れてきた。その
中には空を飛ぶ知識が含まれていた。

「よし、さっそく空を飛びますか!!?」

知識の通りにやってみると本当に空を飛べた。

「おつ、本当に空を飛べた。このまま自分だけ助かるのも気が引けるし全員は助けられ
ない、よし」

俺は、近くにいたお嬢様風の女の子を助けにそこへ飛んだ。

「ちよつと、ごめんよ」

「キヤア」

「あ、あまり喋らない方がいいよ。舌噛むから」

注意事項をいってから、お嬢様抱っこして近くの地面まで飛んだ。その時、草むらの
所でうさ耳が見えたが今は無視しよう。そして、近くの地面にその子を降ろした。

「はい、どごうぞ」

「あら、ありがとう」

そして、その子といっしょに他の落ちた2人と1匹の元へ向かった。

「本当信じられないわ！まさか問答無用で引き摺りこんだ挙句、空に放り出すなんて！」
「となりに同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

それは、おかしいだろう。

「いや、石の中に呼び出されては動けないだろう？」

「俺は問題ない」

「めっちゃ身勝手だな」

そんな事を言っていると猫を抱えた子が、服を絞りながら

「(っ)っ……どこだろ？」

「さあな。まあ、世界の果てっぼいものが見たし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」

よくこの状況で、そこまで見ているな。まあ俺も草むらの所に、うさ耳を見たが。多分この3人を呼んだやつだろうな。と、考えていると

「間違いないだろうが、確認するぜ。もしかしてお前たちにも変な手紙が？」

手紙？俺はそんな物貰ってないが…

「そうだけど、オマエはやめて訂正して。ー私は久遠飛鳥よ。これからは、気を付けて。」

「その猫を抱き抱えている貴女は？」

「……春日部耀。以下同文」

「ありがとう春日部さん。そして貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとうよ。見たまんま野蛮で凶悪な逆廻十六夜だ」

「そう、よろしく十六夜君。最後にさつきまでいかにも魔術師みたいな服装をしていた貴方は？」

「そう言われて初めて元の姿になっているのが分かった。」

「俺の名前は、三神直樹だ。よろしく3人とも」

「よろしくな、直樹。そういえば、なんでさつきは助けてくれなかったんだ？」

「…それには激しく同意。おかげで全身ビツシヨ濡れ」

「うっ、さっそくそこを突っ込まれるとは。」

「すまんすまん、1人が限界で近くにお嬢様しか助けられなかったんだ。許せ」

「と、そんな事をしゃべっていたが、なかなかこの3人を呼んだ人がこない。だんだん3人がイライラして来たのが、わかる。」

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だとらちが、あかないからこうなったら、そこに隠れている奴にでも話を聞くか？」

「そう言って、十六夜が指をさしたとこの草むらが揺れた。」

第2話 黒ウサギと出会う。

十六夜が指した草むらから、黒いうさ耳が見えた。まあ俺は知ってたんだが、十六夜はよくあの状況で分かったな。

「なんだ、貴方も気づいていたの」

貴女もですか、飛鳥さん。

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そっちの猫を抱いている奴や、直樹も気づいていたんだろ」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「まあ、空を飛んだ時見えたからな」

「……へえ？面白いなお前ら」

軽薄そうに笑うが十六夜、目が笑ってないから、とても怖いぜ。他の人たちも、殺気の籠もった冷やややかな視線を黒いうさ耳を持つ少女に向けている。あの子少し怯えているし、かわいそうだな。

「や、やだなあ御4人方。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいまよ？そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穩便に御話を聞いていただけ

たら嬉しいでございますヨ?」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「ガンバ! 黒ウサギ」

「あつは、取りつくシマもないですね。あと、最後の方ありがとうございませヨ」

うん、だつてかわいそうじゃん。黒ウサギさんも涙目だしさ。しかし、なんか値踏みしている目をしているな。

すると耀が、不思議そうに黒ウサギの隣に立ち、黒いうさ耳を…

「えい」

「フギヤ!」

驚掴みして、強く引つ張つた。うわゝ痛そう。

「ちよ、ちよつとお待ちを! 触るまでなら黙つて受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう見ですか!!?」

「好奇心が為せる業」

「自由過ぎます!」

「へえ、このうさ耳つて本物なのか?」

今度は、十六夜が黒ウサギのうさ耳を引き抜きに掛かる。やめたれよ、黒ウサギ半泣きだぜ。

「……じゃあ私も」

飛鳥さん!? 貴女もですか。く、黒ウサギマジで、頑張れ。

「ちよ、ちよつとお待ちを、そこの人見てないで、助けてくださいっ」

どうしようかな? まあ…

「ガンバ!!? 黒ウサギ」

「そ、そんな……!」

黒ウサギは、言葉にならない悲鳴を上げていた。 すまん黒ウサギ。

「……あ、あり得ない。あり得ないのですよ。まさかこんなにも話を聞いてもらうのに、小二時間も消費してしまうとは」

そう、あれから十六夜達は二時間近く黒ウサギのうさ耳を触り続けた。さすがに、ヤバイと思ったから皆んなを止めに入っただけ。

「最後の方、本当にありがたいなこのデスヨ」

「いや、俺も早く止めに入った方が良かったかもな、すまん黒ウサギ」
「いいからさっさと進めろ」

マジ泣きしている黒ウサギを見ながら十六夜が言った。

他の人たちも彼女の話を聞いてみようと、思ったのか黒ウサギの事を見ている。それを見て黒ウサギが、

「それではいいですか、御4人方。定「「早くしろ」」」わかりました。ようこそ!!?」箱庭の世界へ」

黒ウサギが、両手を広げて大きな声で言った。

第3話 ギフトの弱点

「「箱庭？」」

ああ、やっぱりここは箱庭だったんだ、俺は1人納得している。ならここは『問題児たちが異世界から来るそうですよ?』の世界だど。

「YES！皆様はお気づきかもしれませんが、貴方方たちは普通の人間では有りません」
随分とハッキリ仰いますね、黒ウサギ。以外に心にくるもんだな。

「その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその”恩恵”を用いて競いあう為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

そう言い、黒ウサギは両手を広げて箱庭をアピールしている。それから、飛鳥の質問から始まりギフトゲーム、箱庭のルールなど黒ウサギは説明してくれたが、俺はそんな事を気にしていない。何故ならそんな事は後で聞けばいい、今はこの質問がしたくて仕方がないのだ。

「おい、黒ウサギ。t「待てよ。まだ俺が質問してないだろう」

見事に十六夜に被せられた。十六夜は俺から先に言わせろみたいな感じで見ている。仕方ない、今回は譲るとしよう。

「いいぜ、先に言えよ十六夜」

「ありがとな、直樹」

そのやりとりを聞いた黒ウサギが、

「……………どういった質問です？ルールですか？ゲームそのものですか？」

「そんなのはどうでもいい。本当にどうでもいいぜ、黒ウサギ。俺が聞きたいのはたった一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

手紙に何が書かれていたんだろう？結構気になる。そして十六夜が何もかを見下すような視線で、

「この世界は……………面白いか？」

まさか、十六夜と質問が、被るとは。他の3人は知らないが俺は2度の人生だ。だったら面白い方がいいに決まってる。

その十六夜の質問に黒ウサギは一瞬驚いたようだが気を取り直してこう言った。

「―――YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証します」

その顔はとびつきりの笑顔だった。

「直樹さんの質問はよろしいですか？」

「いや、いい。十六夜と同じ質問だったから」

「分かりました。なら、新たな同士候補である皆さんを何時までも野外に出しておくのも忍びない。ここから先は我らのコミュニテイでお話させていただきますので、黒ウサギについてきてください！」

そう言い黒ウサギが歩いたので俺たちにはついて行くことにした。あ、女神から貰った手紙の続きでも見よう。それに俺のギフトの弱点も分かったしな。

『注意事項ですが、まず1度夢幻召喚（インストール）したサーヴァントカードは24時間使えません。後夢幻召喚（インストール）出来るのは1日3回までです』

これは、重要な情報だな。気をつけて使わなければ。

『後、夢幻召喚（インストール）の下位に限定展開（インクルード）があります。限定展開（インクルード）は1日に5回使えますが、夢幻召喚（インストール）で使ったカードは使えません。逆も同じです。限定展開（インクルード）も夢幻召喚（インストール）と同じで、1度使ったら24時間使えません』

なるほど、そんな機能まであるのか。

『最後に、一部の英霊をサーヴァントカード化出来ませんでした。例えば、影の国の女王、世界最古の英霊などです。後、夢幻召喚（インストール）したときに出来る限り男性の姿になるようにしてありますが、それが出来ない場合があります。その場合は、女性化します。それと、神性が高いサーヴァントは稀にサーヴァントカードから出て来る事があるので注意してください。その事を考えて良き異世界生活を送ってください』

なるほど、それは注意しなくては。此れには書かれてなかったが、俺はこのギフトの弱点が分かった。それは英霊の力を使う事は出来るが、使い熟す事は出来ないということだ。これに限っては場数を増やさねばならないだろう。それと、俺は『問題児』を詳しく知らない。これから何が起こるか分からない。まあその方が楽しいのだが。そんな事を考えていたら、門みたいなのが見えてきた。

第4話 ジン=ラッセル登場

目の前に門が見えてきたが、俺は1つ問題を見つけた。いつの間にか十六夜が居なくなっていた。あいつはどこに行つたんだ？ 近くにいろお嬢様に聞いてみる事にした。

「久遠さん、十六夜が何処に行つたか知らないか？」

「久遠さんは辞めて、飛鳥でいいわ。十六夜君なら、」ちよつと世界の果てを見てくるぜ！」と言つて駆け出して行つたわ」

「ありがとう、飛鳥」

本当、十六夜の奴は自由人過ぎるだろ。そんな事を考えていたら、門のすぐ近くに着いた。門の前には1人の男の子がいた。誰だろう？ 黒ウサギの知り合いかな？

「ジン坊っちゃー！ 新しい方を連れてきましたよ！」

あの子の名前は、ジンというのか。覚えておこう。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの3人が？」

あ、

「はいな、こちらの御4人様がー」

そして黒ウサギはこちらを見て固まった。無理もない。何故なら十六夜が居ないん

だもな。まあ俺が言うのも何なんだけど、黒ウサギもこの状況になるまで十六夜が居ない事に気が付かないなんてな。びっくりだせ。

「……え、あれ？もう一人いませんでしたっけ？ちよつと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から”俺問題児”ってオーラを放っている殿方が」

それ、十六夜の事を言っているのか黒ウサギ。だったらすごい言われようだな。黒ウサギの気持ちも分かるけど、少しオブラートに包んで言えなかったのか？

「ああ、十六夜君のこと？彼なら”ちよつと世界の果てを見てくるぜ！”と言って駆け出して行ったわ。あっちの方に」

そして、飛鳥が指を指したのは、上空3000mから見た断崖絶壁だった。あいつは本当に自由人だな。それを聞いた黒ウサギが、

「な、なんで止めてくれなかったんですか！」

”止めてくれるなよ”と言われたもの」

「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかったのですか!?!」

”黒ウサギには言うなよ”と言われたから」

「絶対に嘘です！実は面倒くさかったのでしょう御二人さん！」

「うん」

黒ウサギは、前のめりに倒れた。マジドンマイだよ黒ウサギ。そんな黒ウサギとは対

照的に、ジンは蒼白になって、

「た、大変です!」世界の果て”にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣が」

「「幻獣?」」

幻獣とは何なんだろう?

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に”世界の果て”付近には強力なギフトを持ったものがあります。出くわせば最後、とても人間では太刀打ちできません!」

「あら、それは残念。もうすぐからはゲームオーバー?」

「ゲーム参加前にゲームオーバー?.....斬新?」

「十六夜なら、大丈夫だと思っただけなん」

「冗談を言っている場合じゃありません!」

ジンは必死に事の重大さを訴える。それに俺が言った言葉が冗談じゃ、ないんだけどは?すると黒ウサギがため息を吐きながら、

「はあ.....ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが、御3人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか?」

「わかった。黒ウサギはどうする?」

「問題児を捕まえに参ります。事をついでにー」箱庭に貴族”と謳われるこのウサギを馬鹿のしたこと、後悔させてやりますよ」

そして、黒ウサギは怒りのオーラを全身から噴出させ、みるみるうちに艶のある黒い髪を淡い緋色になった。箱庭の貴族はこんな事ができるのか。すごいな。

「一刻程で戻ります！ 皆さんはゆっくり箱庭ライフをご堪能くださいませ！」

そうして、黒ウサギは弾丸のように飛び去り、あつという間に4人の視界から消え去っていった。すごいな黒ウサギ。

マジみなおしたは。

「じゃあ、御言葉に甘えて先に箱庭に入るとしましょう。エスコートは貴方がしてくださいさるのかしら？」

「え、あ、はい。コミュニティのリーダーをしてるジン||ラッセルです。若輩ですがよろしく願います。3人の名前は？」

「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」

「春日部耀」

「俺は三神直樹だ、よろしく」

「それじゃあ箱庭に入りましょう。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」

そして俺たちは箱庭の世界に入っていた。

第5話 耀のギフト

「箱庭へようこそ皆さん。まずは軽い食事でもしながら話をしましょう」

ジンはそう言いながら箱庭の外門をくぐったので、俺達もジンについて行くことにした。箱庭の中に眩しい光がさした。おかしいな？天幕の中に入ったのに太陽が見えるなんて。

「なあ、ジン。外から見た時は箱庭の内側は見えなかったのになんで、太陽のみえるんだ？」

俺の質問にジンが

「箱庭を覆う天幕は内側に入ると不可視になるんですよ。そもそもあの巨大な天幕は太陽の光を直接受けられない種族のために設置されていますから」

なるほど、そうなのか。じゃあ此処には、吸血鬼でもいるのなか？飛鳥もそう思ったのか皮肉そうに

「それはなんとも気になる話ね。この都市には吸血鬼でも住んでいるのかしら？」

「え、居ますけど」

「……そう」

マシンか、本当にいるんだ。あつてみたいな。ふと見ると耀の抱えてる猫が何か鳴いてるな。

『ニャー、ニャニャニャニャニャー』

「うん、そうだね」

会話が成立しているだど?!? 気のせいかもしれないけどな。

「お勧めのお店はあるかしら」

飛鳥さん、そんなに何か食べたいんですか?

「す、すみません。ではこの店で如何ですか?」

そしてジンが招待したのが「六本傷」の旗を掲げている店だ。

「ええそこでいいわ、他の人達もいいかしら?」

「・・・問題ない」

「ああ、俺も大丈夫だ」

そして俺たちはその店のカフェテラスに座ったら店の奥から注文を取るためか猫耳に少女が飛び出して、て猫耳?!? マジか、猫耳の少女までいるのか箱庭。

「いらつしやいませー。御注文はどうしますか?」

「えーと、紅茶3つと緑茶が1つ。あと軽食にコレとコレを」

『ニャーニャー、ニャニャニャー』

「はいはい。ティーセット4つにネコマンマですね」

アレ？ネコマンマなんて頼んでないんだが。ジンと飛鳥も不可解そうに首を傾げる。それ以上に驚いているのは耀だった。信じられない物を見るような眼で猫耳の店員を見て問いただした。

「三毛猫の言葉、分かるの？」

「そりゃ分かりますよー私は猫族なんですから。お歳のわりに随分と綺麗な毛並みの旦那さんですし、ここはちよつぴりサービスもさせてもらいますよー」

『ニャー、ニャニャー、ニャー』

「やだもーお客さんつたらお上手なんだから」

そうして、猫耳の少女は長い鉤尻尾をフリフリしながら店に戻っていった。三毛猫が何を言ったか気になるが、耀は三毛猫と会話が出来る事が分かった事は確かだ。

「……箱庭つてすごいね、三毛猫。私以外に三毛猫の言葉が分かる人がいたよ」
『ニャー』

「ちよ、ちよつと待つて。貴女もしかして猫と会話ができるの？」

飛鳥が動揺した声で質問したら、耀はコクリと頷いた。ジンも興味深く質問を続けた。

「もしかして猫以外にも意思疎通は可能ですか？」

「うん、生きてるなら誰とでも話は出来る」

「それは素敵ね。じゃあそこに飛び交う野鳥とも会話が？」

いや、さすがに無理なんじゃないか？

「うん、きつと出来……る？」

出来るんだ？？ 凄いなそれ。

「ええと、鳥で話たことがあるのは雀や鷺や不如帰（ほととぎす）ぐらいだけど……ペンギンがいたからきつとだい？」 「ペンギン？」

凄過ぎるだろ、思わず大きな声が出てしまったぜ。

「し、しかし全ての種と会話が可能なら心強いギフトですね。この箱庭において幻獣との言語の壁というのはとても大きいですから。黒ウサギでも、全ての種とコミニケーションをとることはできないはずですし」

そうなのか。黒ウサギでも無理なのか。

「そう……春日部さんは素敵な力があるのね。羨ましいわ」

飛鳥は憂鬱そうな声と表情で呟いていた。どうしたんだ？ 飛鳥は。

「久遠さんは」

「飛鳥でいいわ。よろしくね春日部さん」

「う、うん。なら私は耀で。飛鳥はどんな力を持っているの？」

「私？わたしの力は……まあ、酷いものよ。だって「おんやあ？誰かと思えば東区画の最底辺コミュ”名無しの権兵衛”のリーダー、ジン君じゃないですか。」

飛鳥のギフトを喋ろうとしたら品の無い上品ぶった声でした。

第6話 ギフトの暴走

「今日はオモリ役の黒ウサギは一緒じゃないんですか？」

後ろを振り返るとそこには、似合わないスーツを着た変な男がいた。どうしてだろうか？こいつを見ているとイライラしてくる。ジンの知り合いらしい。

「僕らのコミユニティは『ノーネーム』です。」フォレス・ガロのガルドⅡガスバー「黙れ、この名無しめ。コミユニティの誇りである名と旗を奪われた分際で女々しくも新しい人材を呼び寄せたらしいじゃないか」

そして、そいつは俺達座っていたテーブルに勢い良く座った。

それにしても、コミユニティの誇りである名と旗？それはどういうことだ？すると飛鳥が少しイラツとしながら

「失礼だけど貴方はどなたなのかしら？初対面の人には氏名を名乗ったのちに一言添えるのが礼儀じゃなくて」

それを聞いたタキシードの男は名を名乗った。

「おっと失礼。私は箱庭上層部に陣取るコミユニティ」六百六十六の獣 傘下である「鳥合の衆」のコミユニティって待てやゴラア!!？誰が鳥合の衆だ小僧オオ」

ジンはこの男の事がよほど嫌いらしい。それにしてもどうしてだろうか？こいつと会ったのは初めてのはず、なのにどうしてかこいつを見るとイライラする。

ジンや、飛鳥達がこいつと話しているらしいが俺は謎のイライラと頭痛に襲われてそれどころではなかった。頭の中で子供達の泣き叫ぶ声が響いている。それがとても辛い。なんだ、なんだ、なんだ!!？この泣き叫ぶ声は、知らない

「ちよつと、直樹君大丈夫？」

知らない、知らない、知らない、知らない、知らない知r.:

「えいッ」

「ぐは、痛ってー。突然何するんだ飛鳥」

いきなり飛鳥に叩かれた事に文句を言ったが内心では助かった。あのままでは俺はどうにかかってしまいそうだ。

「あら、人の話を聞いてない貴方が悪いのよ。で、貴方はどうするの？」

「どうするの？つて何が？」

ヤバい、イライラと頭痛で何も聞いてなかった。

「貴方も聞いてなかったようね。いい、ジンくん達のコミュニティは崖っぷちでその起死回生の策で私達が呼ばれたの。そんなコミュニティに入るなら俺のコミュニティに入れてガルドが言ってるの」

なるほど、こんな話になっていたのか。ならどうするか、考えるまでもない。俺は：「俺は、ジンのコミュニティに入る」

「ど、どうしてですかな理由を聞いても？」

虎の確か名前はガルド？が聞いてくる。こいつの声を聴くだけでもイライラしてくるが今はおいていこう。

「この感じだと、飛鳥や耀はジンのコミュニティに入るといったと思う」

「ええ、そうよ。私達はジン君のコミュニティに入ると言ったわ」

やはりか。なんとなくそんな気がしたんだ。

「飛鳥達が入るなら俺も入りたいと思う。それにだ」

「それに？」

こいつと話していると、子供達の泣き叫ぶ声が響いている。そして一瞬だけ聞こえたんだ。

「子供を殺すような外道のコミュニティに入る訳無いだろ」

こいつが、子供を殺すよう命じたのが。これが何かの間違いだとすぐに否定するはずだ、その時は謝ればいい。だかもし違ったら…：

「なッ!?ど、どうして知ってやがる!?？」

こいつは認めた、子供を殺したのを。『認めたな、吾の前でッ!??なんだこの思考は、

俺の思考ではない。では誰の考えだ。ふとクラスカードを見たらアーチャーのカードが光っていた。どういう事だ。考えようとしたら、俺の意識が誰かの意識に取り込まれた。

「吾の前で子供をころしたのを認めたなツ!!?許さんぞ汝!!?獣らしくここで吾が狩つてやろう」

「どうしたの?三神君落ち着いて」

「落ち着く?そんな事で出来るわけ無かろう。邪魔をするならば汝らも殺す」

ヤバい、これはヤバい、このままでは。どうする、どうすれば良い?

「仕方ないわ、コレは使いたくなかったけど」

飛鳥が何かををしようとしている。

「三神君、正気に戻りなさい」

その声を聞いた瞬間、身体の主導権が誰から奪えた

「ふうく、ありがとう飛鳥。助かったよ」

「あら、いいのよ。それにしても大丈夫?まるで別人のようだったけど」

確かにあれは俺ではない。今も心の中で『何故邪魔をする』とあいつの声が聞こえる。大丈夫だ。あいつを生かすつもりは無いと心の中でそいつに語りかけると嘘の様にそいつの思考が消えていった。

「おい、ガルド」

「な、なんだ」

ガルドは俺を警戒している。当たり前か、殺されかけたものな。

「俺達と『ギフトゲーム』をしよう。貴様の”フォレス・ガロ”存続と”ノーネーム”の誇りと魂に賭けて」

第7話 サウザンドアイズ

ガルドにギフトゲームを挑んだ後イライラと頭痛で聞いて居なかったジンのコミニテイの現状を聞いていたら黒ウサギが十六夜を連れて帰ってきた。この様子だと十六夜に説明したのだろう。ジンがガルドにギフトゲームを挑んだ事を黒ウサギに説明したら

「な、なんであの短時間に”フォレスト・ガロ”のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか!?？」

「しかもゲームは明日!?？」

「しかも敵のテリトリー内で戦うとか一体どういうつもりです!」

そんな黒ウサギのマシガン質問に俺たちは

「「ムシヤクシヤしてやった。反省はしていません」」

「黙らっしやい!!?」

いや黒ウサギには悪いがこの件に関してはこんな感じにしなきゃアイツが納得しなくて下手したら宝具を発動してヤバかったと思う。それに勝ち目はもちろんあるし、よほどのことがない限り負けないゲームだ。

「いいじゃねえか黒ウサギ、見境なく喧嘩したんじゃないから許してやれよ」

といい十六夜が黒ウサギを宥めてる。この様子だと十六夜は「ノーネーム」の事について黒ウサギから教えられたんだろう。

「仕方がありませんね、まあ十六夜さんがいれば簡単でしょ」

「いや、俺は参加しないぞ？これはこいつらが売った喧嘩なんだから俺がしやしり出るのは間違ってるしょ」

確かにその通りだ、そもそも十六夜を参加させるつもりなど俺らにもないしあちら側にもないだろ。その後を黒ウサギは何だかんだ言いながら許可したようだ。黒ウサギはチヨロイン属性があるかもしれない。

「ではこれから皆さんには“サウザンドアイズ”というコミュニティに行きギフトの鑑定してもらいます」

なんだそれは？コミュニティの名前だろうか他のみんなも首を傾げている。なので俺は聞いてみた。

「黒ウサギ、“サウザンドアイズ”ってのはコミュニティの名前か？」

「YES! サウザンドアイズ”は特殊な瞳のギフトを持つ人達の群体コミュニティにして箱庭の全てに精通している超巨大商業コミュニティなのです。幸いにも近くには支店がありますし」

なるほどわかった、しかしまだ疑問点がある。それは飛鳥が聞いていた

「ギフトの鑑定というの？」

「もちろんギフトの秘められた力や根源を鑑定することです。何にでも正しい力の形を把握した方がより引き出せますから。それに皆様も自分の力の出処は気になるでしょう？」

黒ウサギが同意を求めるが俺を含め複雑な表情を浮かべている。俺の場合はあの女神から貰った力だ。しかし何故だろうか？あの女神の事がよく思い出せない。まあ、そんなこと考えながらそのコミュニティの支店に向かっているの飛鳥が心配そうに話しかけてきた

「そう言えば直樹君、さっきは大丈夫だったの？まるで別人のようだったけど」

さっきの事というとガルドの時のやつか

「ありがとう飛鳥、でも大丈夫だ。少しギフトが暴走しただけだから」

「ギフトの暴走ってホントに大丈夫だったの？」

「ああ、俺のギフトは簡単にいうと英霊の力を借りるものなんだ。多分あと時は力だけじゃなくその英霊の思いを俺についてきたんだと思う」

「あら、なかなか面白い力ね」

飛鳥は気にしなさそうにそう言った。多分あまり俺の恩恵ギフトに興味が無いのだろう。

それにしてもあの時の暴走、多分あの時に俺に乗り移ったのは麗しの狩人と呼ばれたアタランテの思いなのだろう。彼女は子供が好きで、聖杯の願いもそんな感じだったはずだ。そんな事言っているとなんか前が騒がしいようだ。飛鳥と一緒に見ているの白髪の幼女が黒ウサギにくっついていて。傍観していた耀から聞いてみるの白髪の娘は「サウザンドアイズ」のお偉いさんで黒ウサギの知り合いらしい。また今は閉店しているから自室で話すそうだ。因みに名前は白夜叉らしい。

「よし、私の私室に案内しよう」

そういう白夜叉は俺たちを案内した。そして彼女の私室に着き各々が好きなところに座ったら

「改めて自己紹介しよう。僕は「サウザンドアイズ」幹部の白夜叉じゃ、この黒ウサギとは少々の縁があつてな。コミユニティが崩壊した後もちよくちよくと手を貸している器の大きい美少女だと認識してくれ」

「はいはい、お世話になってますよーだ」

その様子だと色々あつたんだらうな。しかし何故だろうか。彼女を見ていると同類を見ているのようだと思ってしまう。彼女とは初対面のはずである、この感じはそうケ●ノを見ているような。なんだか自分でもよく分からない事を考えてたらいつの間にかよく分からない場所に飛んでいた。

え？いやマジでここ何処だ、さっきまで白夜叉の自室にいたはずじゃ

「ん？その坊主は聞いておらなかつたようじゃな。今から汝らは儂とギフトゲームするんじやが、坊主はどうする？”挑戦”か”決闘”か。”挑戦”ならば慰め程度に遊んでやろう、しかし”決闘”を望むのならこの白き魔王と呼ばれた儂が命と誇りに掛けて戦おう。因みに汝以外は皆”挑戦”を選んだ。さて汝はどうする？」

なんでギフトゲームする流れになつてるのは置いてくとして俺はどちらを選ぼうか。普通なら”挑戦”を選ぶところだろう。白夜叉は俺たちよりも何百倍強い、何故だか分からないがそれは分かる。しかしそれなのに…

「ああ、決めたよ俺は”決闘”にするよ」

第8話 白夜叉とのギフトゲーム

決闘すると俺が言った瞬間黒ウサギや白夜叉は驚いたふうにくつつちを見た。

「な、何言ってるんですか！ 白夜叉様はいくら元とはいえ魔王の一角。今すぐ撤回して十六夜さん達と同じ挑戦にするべきデスよ!!」

確かに黒ウサギの言うとうりだ、普通は挑戦にするだろう。でも、何故か俺は決闘したいと思ってしまった。故に俺は決闘を選ぶ

「ほう、この白夜叉を甘く見られたものじゃ。しかし良かろう身の程を知らせるのには良い機会じゃ」

白夜叉は受けてくれるらしい。そんな白夜叉に黒ウサギは止めにかかっていた

「お待ちください白夜叉様、いくらなんでも……s「くどい黒ウサギ。これはこやつが望んだ決闘じゃ」そうですか」

黒ウサギはどうやら折れたらしい、ほかの3人はこちらを見ている

「おい、直樹マジでやるのかよ」

十六夜が話しかけて来た、口調は普通だが目は笑っていない。その事に少し怯みながらも

「ああ、俺は決闘を選ぶよ。俺の力がどれだけ箱庭に通じるか確かめてみたい」

「その理由は分かるけどよ、ならなんで挑戦にしない？挑戦でもそれが分かるだろうよ」
「確かにその通りだな、だけど俺はどうしても決闘したいらしい。俺にもわからんけどな」

そう言うも十六夜は好きにしろといったふうには去って行った。

「よし童、準備はいいか？先に言つとくが決闘は下手したら死にも繋がる、それでもやるか？」

「ああ、よろしく頼むよ白夜叉」

そう答えると白夜叉は了解したというふうには懐からカードを取り出した。すると虚空から輝く紙が出てきた。白夜叉はそれに指を当てて何かを書いていた。

『ギフトゲーム名 " 白き夜の魔王と英雄の一撃』

・プレイヤー 三神直樹

・ホストマスター 白夜叉

・クリア条件 白夜叉に攻撃が入ること、ホストマスターの降参

・クリア方法 白夜叉に攻撃する、" 力 " " 知識 " " 勇気 " の何らかで白夜叉

に認め

認められる

・敗北条件 プレイヤーの戦闘不能及び降参

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを

開催します

”サウザンドアイズ”印

これがギフトゲームか、成程面白い俺はそう思った。なんの英霊で闘うかは決めてい
るがどうやって勝とうか考えていると飛鳥に話しかけられた

「ねえ、本当にやるの？」

「ああ、本当にやるよ。俺がそれを望んでいるから」

「…そう。それはあなたの意思ならそれでいいわ。せいぜい頑張りなさい」

そう言って飛鳥は去って言った。多分飛鳥は俺がまた乗っ取られたんじゃないかと
心配してくれたのだろう。

「おい小僧、準備は出来ているな？」

白夜又は扇子で顔の半分を隠しながらこちらに問うてきた。その目は何かを見定め
るような目だった

「ああ、こちらノ準備は大丈夫だ。いつでもやってくれ」

「そうか、ならこのコインがトスして落ちたら開始としよう」

そう言って白夜又はコインをトスした。トスされたコインはクルクルと回転しながら

ら地面へと落ちた

「夢幻召喚（インスタール）アーチャー!!」

ー真名はエミヤー

俺はアーチャーのエミヤを夢幻召喚（インスタール）した。何故俺がエミヤにしたか、それは俺がまだまだ夢幻召喚（インスタール）した英霊の力に慣れてないからだ。なので手札が多いエミヤにした。

それを見ていた白夜叉は興味深そうに見ていた

「なかなか面白いギフトじゃのう、先程までなかった力を感じる。ふむ口寄せの類かのう？」

「どうかかな？それは闘ってみなきゃ分からないぜ」

俺はそう言いながら白夜叉に向かって走りエミヤの武器の象徴である白黒の夫婦剣『干将・莫耶』を投影した。初めての投稿だが上手く言ったと思う。そして白夜叉に斬りかかったがすんなりと避けてしまう

「いきなり武器を生み出すか、なかなか面白いギフトじゃな。しかしその武器ただの武器ではないな？宝剣の類か」

凄いい、白夜叉には見ただけで干将・莫耶がただの剣じゃないことを見抜いたか。でもこの夫婦剣の性質までは見抜けていない。俺は白夜叉にまた斬りかかるが今度は白夜

又は持っていた扇子で受け止めた

「拍子抜けじゃのう。私に挑もうとするからそれ相應の力があると思っていたが」

そう言つて白夜又は干将と莫耶を受け止めていた扇子で破壊した。いや待て、なんだその扇子どうゆう造りになつてやがる

「ふむ、これか？これはただの鉄扇じゃよ」

マジか、ただの鉄扇で剣を破壊するとかどんな力してやがる。俺は急いで距離を取つてまた2つの剣を投影した。それには白夜叉も驚いていた。

「やはりなかなか面白いギフトじゃな。なら次は此方からゆこう」

そう言う白夜叉の背後に複数の水の塊が浮かびこちらに撃ち込んできた。どこの英雄王だつ。そう思いながら自分に当たるものだけを切り払つていった。途中で剣が破壊されたが瞬時に投影し対処した

「ふむふむこれを耐えるか、まずは合格じゃな。このままではジリビンだぞ？さて次はどうする？」

確かにこのままではジリビンだ。ならエミヤのあれをやるか。

「投影開始（トレース・オン）」

そうして投影した干将・莫耶を投げた

「こんなの当たるわけないだろ」

そうやって白夜叉は避ける。だがいいこれは布石だ。そうやって同じことをしながら白夜叉はに向かつて走り出す。

「鶴翼 欠落ヲ不ラズ（しんぎ むけつにしてばんじやく）」

「心技 泰山ニ至リ（ちから やまをぬき）」

白夜叉は俺に注目しているから白夜叉が避けた剣がこちらに来ると思っていない今がチャンスである

「心技 黄河ヲ渡ル（つるぎ みずをわかつ）」

「なぬっ」

ここで白夜叉が避け続けていた剣がこちらに向かつてることを知る。だが遅い!!

「唯名 別天ニ納メ（せいめいりきゆうにとどき）」

「両雄 共ニ命ヲ別ツ（われらともにてんをいだかず）」

そしてオーバーエッジにした干将・莫耶を白夜叉に斬りかかる。これを避けても周りの剣で攻撃が入る!!

「鶴翼三連!!」

白夜叉に斬りかかった衝撃で辺りが土煙で隠れた

第9話 白夜叉とギフトゲーム2

土煙が晴れた。この一撃は手応えがあった!!

だが俺が見たのは驚くべき光景であった。なぜなら俺の干将・莫耶は白夜叉の鉄扇で止められ他の干将・莫耶は白夜叉が出したと思われる氷で止められていた。おいおいマジかよ、認識外からの攻撃だぞっ。どうして止められた。

「この程度で驚かれては困る、この程度の攻撃を防げなくて魔王が名乗れようかつ!私を舐めるなよ小僧、だが今の攻撃はちと驚いた。少し本気を出すか」

そう言うのと今まで感じたことの無い圧を感じた。これでも白夜叉は本気じゃないのか

「これはやばいな。だが面白いっ」

俺にしては随分と攻撃的な思考だと思ふ。それでもこの世界でどれだけ俺の力は通用するのか。それに…

「どうした!!他の事を考えてるとは面白い」

白夜叉の攻撃がさっきまでより鋭さを増した、このままだと耐えられない。てか氷で遠距離攻撃しながら鉄扇で近距離とか、ヤバすぎる!!

「グハッ」

さっきから所々攻撃が入っていたか遂に強烈な一撃を喰らってしまった。なんて強い一撃だ、これでも白夜叉は本気じゃないのか。

次の手を考えなければ、じゃなきゃ白夜叉に負けるっ!!

「ほう？まだ手があると見た、よいよい存分にやるが良い。それでも私には届かぬとしれ」

「そうかよ、なら望み道理俺の次の手を受けてみる」

俺はある作戦を思いついた、さっきの白夜叉みたいな戦い方だ。

俺は白夜叉の攻撃を迎え撃たず避けながら

「トレース・オン
投影開始」

「憑依経験、共感終了」

すると俺の周りにいくつかの空間の歪みが出来た、白夜叉は怪訝し少し距離をとった。

「ロールアウト
工程完了。全投影、待機」

すると空間の歪みからいくつかの剣が出てきた。

「なるほど面白いっ、くるが良い!!」

白夜叉は多分全部を避けるつもりだろう、それは想定済みだ。だからこそこの伏線が

使える!! 攻撃が来ないなら止まり固定砲台見たいに剣を投影し発射する!!

「フリーズアウト、ソールドパレルフルオープン停止解凍、全投影連続層写!!」

そして投影した剣たちを連続で撃ち込んでいく、それを全て避けたり鉄扇で弾いたりして。

そうすると白夜叉の周りに次々と剣が地面に突き刺さる。この状況を待っていた。

「どうした!! 剣を放つだけか、その程度で白夜叉を倒せると本当に思っているのか? それとも私を馬鹿にしているのか?」

「そんな訳が無いだろ白夜叉!! ここからだ!!」

そしてある程度の剣を投影しある武器を投影する準備をしてこの一言を放った。

「ブローケンファンタジズム壊れた幻想!!」

すると剣がいきなり爆発した。これには白夜叉は驚いたが多分防いでいるだろう。土煙でよくわからないがそれは相手側も同じ、俺はこの状況を作りたかった!! そして俺は魔力を込めながら

「赤原を行け、緋の猟犬!!」

「フルンティンク赤原猟犬」

とある英雄が使った宝具の投影品。これを矢として放った場合俺が健全かつ白夜叉を狙う意思がある限り白夜叉を襲い続ける!!

「ん!!これは危ないの!」

そう言う声が聞こえた。そして赤原獵犬を撃つた為白夜叉の周りの土煙が消えてしまったが大丈夫だと思う。何故なら避けても意味が無いからだ。良かれなくするためもう2発赤原獵犬を放つ。
フルンテイニング

「なるほど避けてもついていく、そしてさっきの台詞。この赤い矢は北歐神話の英雄ベオウルフの武器かつ!!何故それが3本もあると。なかなか面白い恩恵ギフトではないか!!しかしそろそろ鬱陶しい。避けても意味が無いのならこうするまでよ!!」

そうして白夜叉は避けると同時に3本とも凍らせた!!あの速さの赤原獵犬を凍らせるとか…

これが魔王!!強すぎるっ、だけどここまでやったんだ最後までやりきるしかない。

俺は距離をとりある大英雄の武器を投影する。今の俺に出来る最強の一撃を!!

トレンス・オン
「投影開始」

トリガー・オフ
「投影装填」

セツ
「全工程投影完了」

ナインライフス・ドレイドワークス
是、射殺す百頭!!」

そしてこの攻撃を放った!!

「今のはなかなかの一撃だった。よって私もこの一撃をもって手向けとしよう」

そうして俺は今まで喰らった事の無い一撃を喰らい吹っ飛んで行った。

「グハッ、ゲホッゲホッ」

口から結構な血が出て来てしまった。俺はここで負けてしまうのか：

白夜叉に負けて、俺にはもう宝具を使う気力も無いしそもそもこれは勘だが今の俺ではエミヤの宝具は使えないと思う。何故かは知らないが：

悔しい、俺はここで終わってしまふのか

『ほう？まだ諦めないのか、なるほど面白い。少し話してみるとするか』
そんな声を聞いたと思ったら俺は意識を失った。

第10話 白夜叉とのギフトゲーム3

「ここは…どこだ？さつきまで俺は白夜叉と戦っていたはず」

俺は気づいたらよく分からない所にいた。何も無い白い空間みたいだ

「ここは君の精神世界と思ってくれたまえ」

「…誰だ!!」

気づいたら後ろに見たことのある赤い姿の白い髪をした褐色の男性がいた。いやまさか、

「そのまさかだよマスター、私はサーヴァントアーチャー真名はエミヤと言う。知っているだろうが改めて自己紹介しようかね」

本当にエミヤだ。しかしなぜ俺はこんな所にいるのだろうか

「ああ、それは簡単な事だよ。君は白夜叉と言ったかな？かの女性にカウンターを喰らってね気絶しているのだよ。それを利用してクラスカードを通して私たち英霊の力を使う君をここに呼んだのだよ」

なるほどそうゆう事かしかし、なぜ俺を呼んだのだろうか？

「ならエミヤ、なぜ俺をここに呼んだ？何か聞きたいことでもあるのか？」

「ふむ、感が鋭いな。そう私は君に聞きたいことがあってここに読んだのだよ」

そうして俺の前に来たエミヤは真剣な表情でこう言った

「どうして君は白夜叉と決闘する道を選んだのかね？」

「それは、俺の力を試したかったからだ」

俺はそう答えると

「それはおかしい、なら挑戦でも良かったはずだ。ならなぜ決闘にした」

確かにそうなるとなぜ俺は挑戦にしなかったのだろうか。普通自分よりも格上と分かっているのになぜ挑んだのなるか、あの時の事を真剣に思い出してみると、あの時に感じなかったが今なら分かる事が一つあった

「それは…」

「それは？」

「それは、やっぱり試したかったんだ。どれだけ自分のこの力が強いのか、そして仲間を守って自分も生き残れるのかを」

そう言うのと少し驚く顔をしてエミヤはこちらを見た

「仲間を守るは分かるが自分が生き残るとは？」

「俺が死んだ理由は幼馴染みであるマナを守るためだった、それで死んだのは後悔してない。だけどその時マナは悲しんでいた。だから今度こそは仲間を守って自分も生き

残らなければならないと思ったから。だからその力があるか試したかったんだ、挑戦だと手加減されるそれだと本当に魔王とか戦った時どうなるか分からない。だから俺は決闘を選択したんだ」

そう答えるとエミヤは納得したかのようにこちらを見た

「なるほど、そうゆう事か。てつきり私は調子に乗って挑んだかと思っていたが、済まないねマスター」

そうしてこちらに手を差し出した

「今のマスターは完全では無い。クラスカードを使い我々の力を借りるといっなのはあの花の：いや、これは今言うことではないか」

そう言って何かを誤魔化すかのように俺の手を掴み引つ張った。俺の力が完全では無い？どうゆう事なのだろうか。

「今はその事はどうでもいい。いいかマスター君の投影はハリボテに近い、だから弱いのだ。私の事を知っている君ならこの言葉を知っているだろう？私があの小僧に言った言葉を」

確かエミヤが衛宮士郎に言ったあの台詞

「確か『イメージするのは常に最強の自分だ』だったか？」

「そうだ、君の場合それは精神論ではなく君の力に直結する。理由まではいえないがね」

どうゆうことだ？何かエミヤは俺の知らない俺の何かを知っているのだから？

「そして弱い理由は君が投影魔術を知らないことだ。だからこそ君は投影魔術を扱いきれてない。手数で攻めようとした点は評価するがね」

「ならどうすればいいっていうんだよ？」

そうゆうとニヒルな笑みを浮かべエミヤはこう言った

「それはだな……」

side out

白夜又 side

土煙がまだ漂っているが私は勝利を確信している。実際の所私は少しガツカリとしている。あれだけ決闘を挑ん出来たあの小僧がこれだけしか力が無いことにだ。作戦は良いものだったしかしなんとかゆうか自分の恩恵キアスに慣れていない感じかした。

「しかし、あの小僧の恩恵ギアスなんだっただろうか。あの引き寄せる白黒の剣あれは多分干将・莫耶だと思っし私を追尾し続けたあの矢、あやつは赤原フルンテイング獵犬と言っていたな。あれはベオウルフが使っていた魔剣、なのになぜあやつが持っている？ふむ…」

こうしてあやつ恩恵ギフトについて考えていると横から黒ウサギに邪魔をされた

「何やつてらっしやるんですか!!白夜叉様、やり過ぎにも程があります」

「すまん、すまん黒ウサギ。これで勝負決まった早くあやつの所に行きこのギフトで治してやれ」

そうして私は黒ウサギに治癒のギフトを渡しあの小僧の元に向かわせた。

「さて念の為、契約書類ギアスロールを確認するかね」

そして私は契約書類ギアスロールを見て驚いた。そこには勝者である私の名前が刻まれていると思っていたが何も刻まれていなかったのだ

「何も刻まれていないだと、ならばこのギフトゲームは続いているのか!!」

それを確認した私は急いで黒ウサギを止めた

「待て、黒ウサギ!!まだギフトゲームは続いている!!」

「え?」

黒ウサギが確認をとる前に私の元に1本の矢が飛んで来た!!早い!!私は急いでその矢を持っていた鉄扇で跳ね返した

「その通りだとも白き夜の魔王よ、ゲームはここからだ」

そうして出てきたのは先程までと違い白髪の褐色肌になり纏っていた服装を変えた小僧、名は確か三神直樹だった

11話 白夜叉とのギフトゲーム4

白夜叉side

土煙から出てきたこやつは本当にさつきまで戦っていた奴なのか？さつきと服装が変わっている。そして髪が黒から白に変わっておるし雰囲気も先程まで違い過ぎる。それだけでは無い、先程まで負っていた傷が治りかけている。

「おい、貴様は何者だ？本当に三神直樹という小僧なのか、先程までと雰囲気の違いすぎる。もしそうだとしたらルール違反じゃぞ？」

「確かに私は三神直樹ではないがルール違反にはならない、たゞなら三神直樹の恩恵ギフトという事になる」

そう言いながらもこやつは私から視線を外さずいつでも切りかかろうと狙っている。やはり先程の奴とは違う、戦い慣れしてる奴の視線だ。こやつは油断ならない

「ならば今度はこちらからいくとするか!!」

そう言い私はこやつに切りにかかった、すると先程までとは違いこちらの動きを讀み的確に防いでいる。やはり先程までとは違う動きである、こやつは私の攻撃を防ぎながら何かを確かめている節がある。こやつは何を確かめている？

「ふむ、やはり力が強くなっているな。この場所箱庭に来たからかそれとあの人の力そ
つ…」

「何を呟いている？考え事しながらこの私と戦うとは随分な余裕だな？」

そう言いながらも私達は切りつけている、こやつは戦い方は実にシンプルである、私
の鉄扇の攻撃を黒白の2刀で防ぎどちらかが壊れたら壊れた方をまた生み出す。本当
に不思議な恩恵だ。これに似たようなものは知っておる確か…

「この力はお主の力か？それとも三神直樹の力か？」

「これかね？これは私の力だよ。マスターである三神直樹はそれを使えるに過ぎない」

なるほど、ならばこの力の正体は、しかしあの力は戦うにはここまで便利な物で
はないはず

「その力まさか投影魔術か？しかしこれは直ぐに消えて使いようにならなはず、そし
てこれほどの剣も作れないはずじゃ」

「ほう？よく知っているな確かにこれは投影魔術だよ。しかし私の少し特殊でね？
しかしこのままでは拉致があかないしこちらとしてもわざわざマスターの身体を借り
た意味がない。ここからは私から攻めさせて貰う」

そう言うところまでにはない動きと力をして私に迫ってきた。その力は今までにない
力で私も結構な力を割いてこれを防ぐ。本当にさつきまでとは全然違う、この力は今私

が喋っていたこやつでは無くさつきまでの奴の力か？どのような力を持ってして一気に封印されているとはいえこの私に匹敵する力が湧いているのだ？

「そうだ、常に想像するのは最強の自分だ!!私やあの小僧の精神論とは違い君のは文字通りの意味だ!!そして今私は投影とは何か身体に直接叩き込んでいる!!この感覚を忘れるな!!」

なるほどこやつはあの小僧に自分の力を教える為にわざわざ出てきて戦っておるのか。それは…

「舐めてくれるなよ、この白夜叉相手に試すとは!!よかろう、私の本気を持ってその蛮勇の仇となそう!!」

そう言い私は本気の一撃たる水球をそやつに投げ入れた!!

「ふむ、さすがにこれは避けれないな。ならばこの力を最後に教授し君に託そう!!」

そう言うところやつは右手を突き出し

「I am the bone of my sword」

「熾天覆う七つの円環」

そう言うくと七弁の赤き花みたいなものを出し私の本気の水球を防いだ。しかし熾天覆う七つの円環じゃと!!それはトロイア戦争のアイアスが使いし皮の盾の名前、こやつこれすら投影出来るというのか!!

「やはりこれすらも強化されているか、しかし分かったかマスター。これが私の力の真髓だ、後は君の好きなように使え」

「ありがとう、エミヤ。頑張ってみるよ」

するとこやつは先程までの雰囲気に戻っていた

三神直樹 side

俺はこうしてまた戻って来た、エミヤに投影魔術グレイアーション・エテとは何か身体に叩き込まれたしこれからの戦い方も学んだ。そしてエミヤの切り札も…

「元に戻ったようじゃな、しかしこの私を試しに使うとは勇者なのか愚者なのか」

「済まないな白夜叉、ここからは俺の実力をもって貴方に挑むよ」

そう言いながら俺は干将莫耶を投影した。エミヤに身体を渡す前と違い強くなっている。

「ほうならばまずはこれを受けるが良い」

そう言い白夜叉は最初のような攻撃をしてきた、最初とは違いそこに込められている力は桁違いだ

「うお—————!!」

俺はそれを全力で弾き飛ばす!! 最初なら直ぐに壊れていたが今は違う。エミヤは言った、想像するのは常に最強の自分であると。それを意識しながら戦うと先程までとは違いさつきまでとは比べ物にならない力を感じる。なんで俺にこんな力があるかは分からない。だけどそれで白夜叉に勝てるならこの力についての検索は後回しだ

「ほう? これを防ぐか。最初の頃に比べて随分と桁違いだ、しかしこれでは勝てんぞ?」
分かつている、だからこそ俺はエミヤの切り札たる宝具を発動する準備する。それに感ずいたのか雨の如くその力を降り注ぐ。なので俺は

「I am the bone of my sword」

「熾天覆う七つの円環」

俺は熾天覆う七つの円環を投影しそれらを防ぎある言葉を紡ぐ

「I am the bone of my sword」

ここで一枚目が割れる、しかし俺はお構いなく紡ぐ

「Steel is my body, and fire is my blood」

2枚目が割れる先ほどよりも力が増しているのか? 割れる速度がさつきより速い

「I have created a thousand blades」

3枚目が割れる、少し焦りが出てくる

「Unknown to Death nor know to Life」

4、5枚目が割れる、白夜叉もこれがヤバイと感じたのか先ほどよりも量も力も増してきた

「Have withstood pain to create many weapons」

6枚目が割れる、これは待ち合うか? いや間に合わせる!!

「Yet, those hands will never hold anything」

7枚目が割れる、もう後がない。しかし間に合った!!最後のフリーズは白夜叉の攻撃を辛うじて避けながら紡ぐ

「So as I pray, unlimited blade work」

s!!</rb></rp></rp></rt>>その体は、きつと剣で出来て

た!!</rt></rp></rp></rt>></rubby>」

そして俺と白夜叉は剣と歯車の荒れた荒野にいた